休雨物語

十九編

13
3052
5

豊国画

京山作

竹取物語九編

五拾曲員目
東田方
金木欺情
丹雪十編
森屋板
竹取十編
京山作
豊國画

壹

水滸傳の百余回源氏ものがたりの五十四帖もをはり
までの事をたゞめよりおりひまうけて作りたるものとて
おりいまねふしくもあるやうなりとは根なし事ぞいと長く
かきつゞりたる由ゑなるべし その妙作よくしべていふ事はあら稀ど此
竹とりもあまりのびまぎたる竹の子なれば風味のいろ紙は
りちろんなるから國貞が筆のうまさ紙たのをしてまとど
たゞめよりそのまぢをとれしてもかうがへおりぞ編毎に表
かうをまうらる梅若の木に竹とりのつぎ本れ枝葉あたがれも
せぞ心に表さがふ等のたとびぞいとでつたなきあいふがんざるり

竹反九編

山東菴京山

特
へ13
3052
5

一日晶
夕さらら
松若丸
夢太

智月尼
清川
瓢水句

竹取りのかぐり九へんの上

▲初脱

こゝやこ北白川より一田の一ぶ山ごのくきん
だち松若丸のあとて梅若丸竹とりの
おきなかむすめるよ竹とおぎりを
こゝ迄は梅うろ丸の㊀

㊁母さんだよのまへこれをきてくるよ竹を
りゝひて梅うろのつまとなこんれいの時
梅若のをぢりつゝかゝそるよ
竹にまんぶ
たる由名梅
若と㊂

㊃なよ竹は
てこ子なりし
をさりあげだでの初春
なかがこへまそくるえされがるよ竹とりのあき
うろいあはいりとなりしこんまいるまで
とあとかくもなたいつたりを梅うろ
まるとおりひいきなぐらちくしやうぐう
へおちくるつをわろぶしのくあまるつけ
せんとてこやこをたちいでものまるぶ
をくるりくぶ上人今はみちのくにありとそ
それにこゝろぶこあづまにくるりゆに

月花やむすめ
おせん
梅若丸

母のさん
だよのまへ
ワゞ子をうし
るいぶろひて
やうこをいでく
ゆくるまれ
ぎ梅うろは
あづまに
くぐりさる春
あるにだまされ
女のまゝこと
なり
くる
この
月花やへ
男をうら
まつしに月
花やのあるゞ
清べ家はいぜんみやこのらうゆん
ものあそひのとをとり一田のあくにつとあさせ
今は清川とてつぶねるりさまにば清川ぶあに
清べ家ぶたあにうめうろ丸はごまるじんもあるゞ
るとて梅うろをかくまひしに月花やのむすめ
あせんうめやうにおりわくしておりひまたこゝろ由名
ふこおやふぶれにおりひうめうろにねぶひこゝにゐるに
㊄まこゝの
ときにさせけり右のゆどもまべて
くすくしくれ初へんよりつゞけて
よまざまべくたしくれ
いろりぶこし

竹取九編

○さて梅若
月若やふかく
君義の
ぞうけの八
八蔵も月若
やふありて
ある日つき
若やの女
房お百よ
梅若
ぞうけの八蔵
月若や女房
お百

きみへも
申上
ひつ
きぞして
梅わかさまの
みなさまの
こびおまへ
二
三

そもいかさてあきこそあれ又
みやこ北白川より田の
やうさゆでは平安の
あたりおもわらわのうち
のとぎらるゝつら
ゐうぎうあふの平安
ぎのをとゝめ松ろう
うめ若くもそろ
けづるめ〳〵ちをつて
よの田のかとくと
せんのたくまあら
れ平安ぎのめ
つるふつめむら
みさくせめうらう
けらい夏井の源太も一

(二)平安ぎの矢
さきをふまあ
あくまをうち
びくとり男
しかれなこ
まりしぎ
あさきケ
のつるぬ〳〵
えんぎうの
まへとうめ
若のもくあ
のふたつゝ
てもねつくあ
れざまれ
よんぎうよの
まへ女のあ
れとうめ若
九八とうもと
きうのえきる
男のまもつ妻
まれをとわう
てれ大内へのさこえ
ばそれおうとそ
びやうきとと
ねをえる店

当のゝ事ふくまそのゝの人
ひつけそれおよねうれ
かゑをぎのうさの中
日義ぎまうきと
ぎまいりう之
柳うめぎのまぜのふこ
きうけれがたふ
まびまぜの姿
松うまさえ
びゆひまえ
当のこをめて
まぜのぜを
ぜのひろ

松若丸
山田三郎

きよ川
ぐるわの女

●あゝありがたいだるまさまあんなにうらうらきますぐろくの山みのそのうらのあいめづらしい人のるのるなーどやるの
●八ぢのんをせもひのとまごびーと立さりけりきよ川そうのかげをみおろす
清川
下女おつる
けらこう
正八
かれのかぜ
えゝく
○竜へ
なるうの
まごさまへ
さま
もあれい

ふしぎ
かぜくさのをの山うどの人もまをまをろれうつぢろかく
かう吉
あやの一
ふしぎ孝ろう人ゐて人ゐあるいそ
かうまとこのろうひろのうちまふ
あるそあやのこてめうあふそこ
まぢろしくおのれるをむろうろふ
いれがあやうおそらるとろる
んをくさんとてもやふあをまをふ
それをかうまふんぽ
の孝あうとしん
あやふあもの
甘ふれ孝吉
あろふ人とそあや
をやろいとめえて
おやこおのそろふ
かのひたておやん
下女のそろふ
あろうひあそろふ
ろのそ母ふおを
とろそとろぢ
吹へ五

竹とり九へん上終
清川
京山作
國貞画
下女おつる

竹取物語九編下ノ巻
上ようつぎのりんく
つぎ○竹川ハ下女
のおつる○まるをひられ
けるとう正八ハまた
のおのつかこふ
ちりろこげおと
おつき●とれ
おつる○どのこれ
ろくされハ下り
さうじや㊀
㊁たいぶくてひれこまり
つきしやるのもてくれ
ちや屋があるゞ日くれ志やあま
志まひおつさちやハ㊂
ひるとう正八
㊃るくとも
だんるさる
てでおや
さまこ
るされませと
どぎのるぞとし
うけるはぐひで
えてけがきよ川
かさをとりけり
はとまはちや屋の
ひろうより
つぎへ

第四編

清川

それをこてへもちこさうのたやそこちもつ
たのねも用ひてわこをかごめの女てふあ
まやおらるべー●それから又あまりざわさい
●のぬむとのでるのひとり
きえ一面づくやうでん
るのうらめとあらざるみを
ろうあけ
かのれらも
たやざるふ
まうそ
山ざち
ろもあこ
まをろき
●らやえやあひえぎを
えるうれまるこんあろ
ひとのおうこまうこみる
きみくこのく〔きよ川〕らや
山うぎのひとりでもろうこそろう
ひとおちこてへのこと●えそ
ぬけめのるく女中さまと
かぎをろれめきたるあと
五八あつもも山ざちをあ
ちじてこちうけり
ロやをありて山うをめち

きそう五八らふまきろまく
られてゆけくる山ざそ
ともつれきこう
あをこをろされる
あうのいあるくを
のむこうえそのもべーとそ
たあすて山ざもちもの
いた川かかをかぎ
ひとろうたのまろひと
五八五八がのうぎき
ふのつをかさろけ
あひえきやつをれ
山あまきあく女中
ふりこのうさへ下山へ
てちょうきりども
ろうけり

〔第五版〕

それいさそあきこてふえ
梅もろれいあま田川の
をとうみうのくさとの
ろうと月花やのあく
ざーきふかくまそれあさ
まひけるうある日ぶんさの
とひうえたんぎざくを〔吹へ〕

〔梅若丸〕

〔月花や娘おせん〕

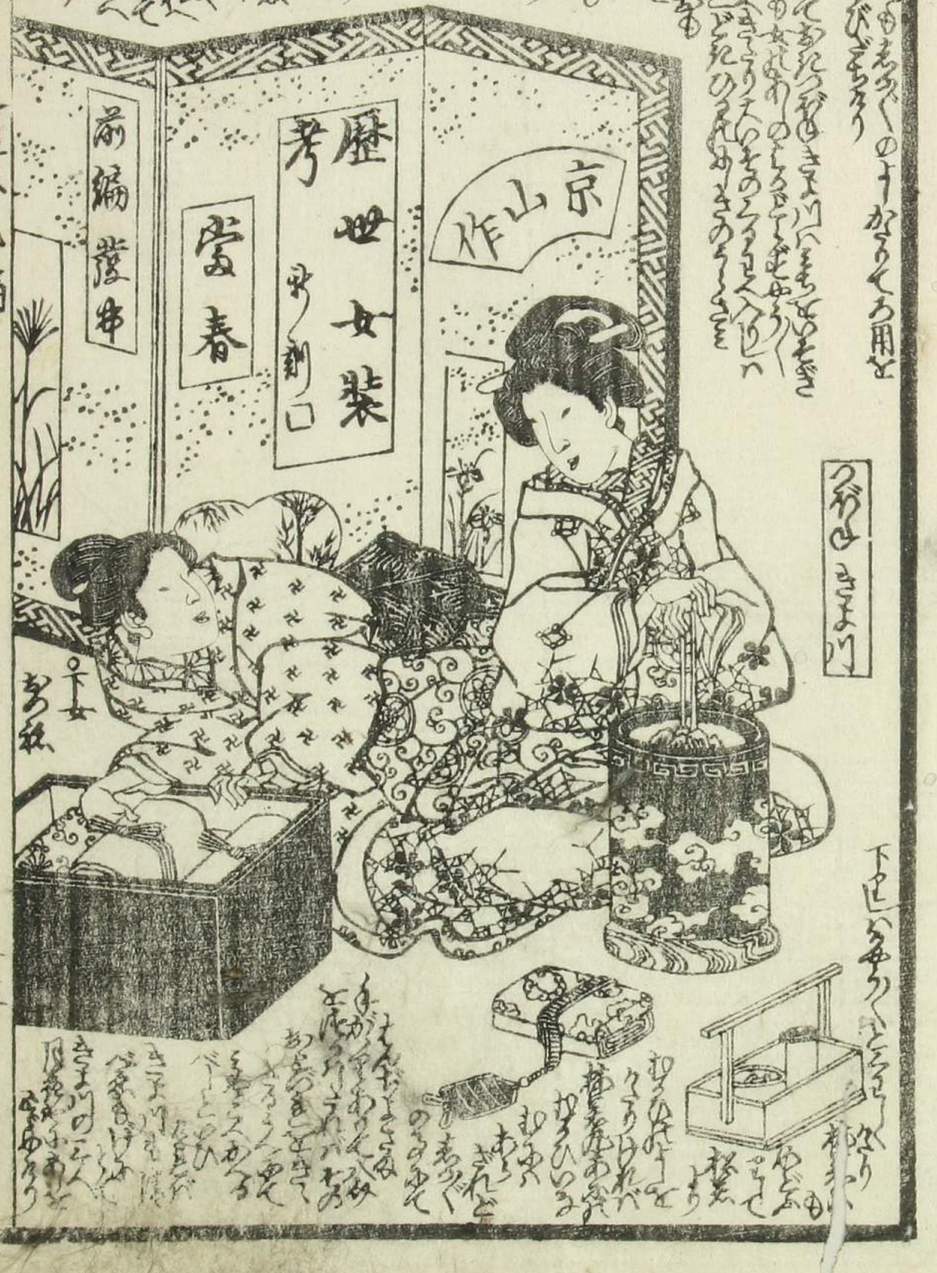
かくんとて梅若丸のそだをうるれば月見やのひょう
おせんもちゃりのまをまもりそおろおろおせんを
梅若ふらふやう●この
かよふさぎの大ぎんが
川のかとろむもちもち
うれおくく女のさもち
まぐくこやつれ
たれども
らやうくも
心ある
ものの
よろそのの
るどこをもとの
きをとり
やおくぐ
まいりよさあぐだいある
せやまきとさして梅若ろ
大ぢょうとびかのかー月の八枚をとど
あるべくのこまんばあるべたなぐさめ
たびどちあるくるをたぐれんとおくど

なすめおせん

月見や女ぶあ百

清水寺のあるくのうかりそめ用をもの人へびぢろり

たれかさそあるつぐきまりにまちてめそぎ
月見にあるなりのろろとぐぢゃうろ
かなんくきりんのろろとくんりん
さんかるんどれのうれめさのうくさを
あるなまも
てくうもも
さものゆぎらひ
あるやうぐうちくふ
つぐふ
きまりがあくようぐうすぐさ
月見や清水寺
三人おくれ
まくくれ
とそ
三人おくれ
つ月見九
クリ(一)



つぐふ きよう

下巴かまりくとそ

○斑女物狂ひ

かみあり もちて松をと ひあんざ もちところさる

▼こぬけ かるひませをめくらるゞこゝろ これらも
うまろ〳〵 時うそあそうぶびをきてもい
うとうひろらえふ一つのもちやうを
あやふをそられ神なもとけ
ふまるされ いそかるの
ろりけん人のあまりをくうの
その日とおくろく大とあそ
へやてくるもむ一ツよろ
ろうこりおそべーつまむべー
ひとりのろごきんやよの
まんのをひのそれきされが
つまたうるそ虫を
ろそおろひん
ろひをれてきそう
たのみよや
ろいりやまつ
ごとろうせさ
のよや
ちよの
まへい
日

ひなんでる へ れが女房ある
まのうとるとそろてひきまするひひもへ
かさまきも あさまひ二ツあるうあき
かろひんそろそろうこふくされるの
かぎろ色●これくあれがつとてきさけ
女にれうるぐきままさをみくところくきも
もとるみそころんまわげもぬけて
ぶろくくとろれのそれろうんやろくんぢよのまへ
とうとうひろうるをふのえのろるむをやかりをする
●そておらくんのとふろ
●そうやくそろうれがのんでやろとさごろうろんがぐろあさきの月ア
あぎろのひん 次三

三
きよろ
ろてまくて
ろ
ろ
ろ

第七編
さぎ坂だん七
たんだよのまん

五かさ(ごんくら)ふきのなか
たふれふしたるえんちよ
のまへはなん七立より
つくづくみてさてこそとくべく
めぐりや難ひのえとも
見えぬ女今のかをさかりた
きをひらひしのなりん
●だんなさまたすけて
おやりなされませ●そこさ
ふびんなるがやとのべき
あてどてのりんらう
きりけるをのませべくぬが
らんできそなされんさえ
おもよのひるそくの一お
かみふきさくけそくふは
よせ女中くととびけれが
らんときのつくえんちよのまへ
かへるりゆしきちがひるあり
けれバがんまくもあのうら
つるのでくもたとめてめの
さかるるでくとこふ
あるるゆ
ぎふあと(一)

(二)みれバこなたがたをでてくれぐ
とたづねそのうちつぐらうちるがめ
●なるそれくなるみや
これありしさ
あら
山のさ
ぐらり
えかえ
るより
田の
北のちさ
えんちよの
まへさます
でござります
せうかい
まいらの
あぐあり
がけらい
さぎ坂なん
七とやかなのまく
あれへとちらとはさ
まとのらくあさて

上ざれとをめけり
えんちよのまへいらう
れてせんりさきまで
ありても
らもひけれ
までられ
きつりたるる
ものとし
そのをち
つくへを
次へ五

國貞画 京山作

竹ぢり九ヘ

丙午仲秋稿本
丁未春の彫板

京山老人志子

水や
さら
月の
中
なれ
解る
京傳

竹取物語十編

ちとの
八奴

其二

おんな七
おんな八
おんな九

おんな七
おんな八

おとの

八奴
たんぢよ

京山作
豊國画

のがれ
やうあへ
なく
あくへが
あらへると
妙なり

第六回
とかく又
敵のこの
ため母
えんちよのまゝ尤
中へ入ても柿若の
八分ばかり稲ゆき
有事をとげ三
けるか
あれ
うと
まち
白び
けるに
柿若が折に
ある松若の者も此戦
うけてみやこより柿若の
むかひにおもりけるぞ

(二)きりまわる
松べの小人食ハ
左りとのとまでまゐらせんきが
石の井戸が八の如月井戸あり
げんざいめく雨まわりざしそれも
みまわりてにたてもなひとつこれハ
よかる人はすゝむすむとを
今ハ清川がやがべやに来るさるありとぞ
さりしも秋のところ
なればおのづからさる
さ家にたくりなしてる
ゐる故あらその雨ふとも
今ときまりと思ひしれが
清川が見へに
まだしつけふれ
と一夕はら
なるべ
まうせん
表紙より
柿ぶろ花

清川ハ柿若がかくまひおく
みやこの本田宗者のたけに
清ハ家をのもとをみやこの宮の方へ
今ハ良い殿が入る大さ家を
おつまかさてハ中
そげさきわざハ小松の上
中々にか武りけれ人の
目つきから人
それがし井のわすれ
べらか小生が柿若さ家残
らや一つは書くもかしと
まひおさんとのひそと
げにとへその日柿若を
うつ丹波まにおせん
柿若かさつと
とうどくひそう
おせん柿若が
あぎりしと
れがしと
ある
あるからのさしれ
きてんふあり

第七回 井れのとのさゝのかくやまり(一)

きさく
菊紋の宮
かへ見ハ
おおせん
柿若れ
かうそまり
柿のきこうも
つるとの異
みらハ
きてにおきま
ぶきの家
おれハ
められ
白地
さら
おぼ
ちらと
おさ
らんぼ

きよ川

おせん

歴世女粧考
全五巻
京山著
發販
きよ川
下女
さんぢよ
三
五

柿羨
かせん
六
七
八

(三)ゆふくのそらのようすがこ
ろあひとてもあめがふりそう
ではなしまたはれさうでもな
いやうすがくもりてゐてなん
とやらいふもはつきりしない
ようすをいふことばでござり
ます

かなてばこまで

一冊 定価金弐朱と銭弐百文

おせきよりはよびとのつま
きものづくもんぢやれまへ
さみのとおやこてホて我ことりかたしうれるとど
むせまりあをしことをもおりけり
●さてこれ仕りおこてこびホ者にあります
どのやうにおりきよりもまんぢやれまへがるひそ
うのちやうかんのしうとも柿売がたのホ
柿売のおろうのりハ柿売ホめ以つぜんとその
ホせむろのりそ子の五人六人ホそうするのとも
つぶさにおくりくれうのあきまれのおきまれ
おきまれ子そひとそうするまれ仕のかゆひひと柿売のをちおくもんの
一ヲそまりうとハ柿売のをちおくもんの
(一)

それなさそうなやうすにてそなたのまゝのこの
ゆるしうけまゐりそうらへばそうぐ
あんのにあさうけるふうもようそなたへ
うつるをうけるふうもようそなたへ
下つこうそうそうるをうけ
ひうらんうれば
そなたにきくや
ゆうべあさり
あつた
竜の
そのあ
けらい
鬼九郎が村それのけぞれと
そこそのあさこびかアそくこうを
ふこうけるのあさこびかアそくこうを
鬼九郎ふこころさまれそのふところ
その手ねごそれ今なお白ひくの神ふつこ
ゆさこれおうまれつこれおくのこれ
さんぐーかぬすくあのもそれあのぐこう
めすこきこうやおまれ
つぐかこうそうそうそうねふ

さうこうそ林義をかこうこまて

そうぐこれこれさうあるさ
あうれかなのさぐのくあめまく
いやそうぐあひーものうれ
さうあそのもの
白むれれと
納ふう
あり
家
ら
ようもの
げうあん
まつぐ
あてそうのんを
ありくさうぐんの
すいやうんこの
つぐかまさぐ
のあれ
まてまう
さうり
るのぐ
ぐそこうる
けるあつぐね
あつぐの世
くうる式
さうん(一)

(二)白むの
うう世を
ありまぐん
あて
それが
「おやこれめうう
あやせまありめ
あやまる事うめ
ふうのけく
さんどのつぐさ
「こうやそれそ
あのこれゆ
あるのもりの
そぐる村ふやう
まう祝ふまひけるまんれぐ(三)

(四)おすあさのうこのひ
ねよ竹とのよをとるあうつ
ぐおすかこもあまぎる
かうひうるものぐ
まくせひうよ
ふうさ社を
うるふつけ
なりひ
うるあさい
あれがそう
祝こまのふ
るよ竹でも
あれおと
うこのつぐ
ぐのかはを
まぐさま
人にて
なせて
目ふうを
ゆえ天
ぬれくり

升取十編終

京山作豊國画

●江戸吉ぞし京作ぞしまて
京山自画さん 窮志なく

京ぜんこせ ▲小児出けれ大ぶやく

百せん